

内務省警視局御用御書物師須原鉄二とは誰ぞ（補正第十七次稿）

—明治警察史の一齣—

（令和 4（2022）年 8 月 9 日（火）現在）

〔目 次〕

（補正経緯）	3
（本 文）	4
（追記 1）北畠茂兵衛経営須原屋の廃業	6
（追記 2）須原屋のその後	7
（追記 3）藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」について （1）（追記 7、10 参照）	7
（追記 4）さいたま市浦和区の須原屋について	8
（追記 5）小川菊松（1888～1962）『出版興亡五十年』（誠文堂新社、昭和 28 年 8 月 5 日刊。復刻版：平成 4 年 11 月刊。）にみる須原屋	9
（追記 6）井上隆明『改訂増補 近世書林版元総覧 日本書誌学大系 76』（青裳 堂書店、平成 10 年 2 月 28 日刊。初版は昭和 56 年 1 月刊。）にみる須原 屋鉄二	9
（追記 7）藤實久美子「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債 証書情報」について	11
（追記 8）創業者葉多野太兵衛創業の清水書店の件	11
（追記 9）国立国会図書館近代デジタルライブラリー本に見る須原鉄二の住所 地	13
（追記 10）藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」について （2）（追記 3 参照）	15
（追記 11）須原鉄二出版「現故書画半切価格」について	15
（追記 12）尾崎富五郎編『諸品商業取組評 初編』（明治 12 年 4 月刊）（『東京 雷名商家番付表 明治 12 年板』）について	15
（追記 13）「ヨミダス歴史館」、「聞蔵Ⅱビジュアル」に見る明治 21（1888）年 以降の須原鉄二関係記事について	16
（追記 14）「ヨミダス歴史館」、「聞蔵Ⅱビジュアル」に見る明治 21（1888）年 以降の須原鉄二関係記事その他について	18
（追記 15）（再録）「須原鉄二と清水書店創業者葉多野太兵衛について—明治・ 大正期出版業者史の一齣—」『法史学研究会会報』第 20 号（平成 29 年 3 月 25 日刊）90～94 頁（【叢説】）	18
【附録】明治警察史コーナーHP 項目一覧（抄）	24
【関連事項】	25

【関係別稿】（平成 30 年 10 月 9 日追加）

- ・本 HP 別稿：「清水書店とは何ぞや―須原鉄二との関連で―明治・大正警察史の一齣―」（HP 初出：平成 23（2011）年 1 月 8 日（土）初稿作成、逐次改訂中）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shimizushoten.pdf>〉

- ・本 HP 別稿：「須原鉄二と清水書店創業者葉多野太兵衛について（改訂稿）―明治・大正期出版業史の一齣―」（平成 29（2017）年 3 月 25 日（土）初稿作成、HP 初出：平成 29（2017）年 10 月 12 日（木）改訂稿作成、逐次改訂中）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/hatano001.pdf>〉

(補正経緯)

(HP 初載)：初稿：平成 19 (2007) 年 11 月 4 日初稿作成

補正第一次稿：平成 20 (2008) 年 2 月 1 日作成

((追記 1) を追加)

補正第二次稿：平成 20 (2008) 年 9 月 24 日作成

((註 5)、(註 7)、(註 8)、(註 9) を追加)

補正第三次稿：平成 20 (2008) 年 11 月 30 日作成

((註 4) を追加)

補正第四次稿：平成 20 (2008) 年 12 月 9 日作成

((追記 2) を追加)

補正第五次稿：平成 20 (2008) 年 12 月 31 日作成

((追記 3)、(追記 4) を追加)

補正第六次稿：平成 21 (2009) 年 1 月 8 日作成

((追記 5)、(追記 6) を追加)

補正第七次稿：平成 21 (2009) 年 1 月 16 日作成

((追記 7) を追加)

補正第八次稿：平成 21 (2009) 年 1 月 30 日作成

((追記 8) を追加。全文補正)

補正第九次稿：平成 21 (2009) 年 2 月 5 日作成

((追記 9) を追加。全文補正)

補正第十次稿：平成 21 (2009) 年 2 月 15 日作成

((追記 10)、(追記 11) を追加。全文補正)

補正第十一次稿：平成 21 (2009) 年 3 月 22 日作成

((追記 12) を追加。(追記 8、9) を補充。全文補正)

補正第十二次稿：平成 23 (2011) 年 1 月 9 日 (日) 作成

((追記 8) を補正)

補正第十三次稿：平成 24 (2012) 年 1 月 8 日 (日) 作成

((追記 13) を追加。全文補正)

補正第十四次稿：平成 24 (2012) 年 1 月 16 日 (月) 作成

((追記 13) を補正。全文補正)

補正第十五次稿：平成 24 (2012) 年 1 月 31 日 (火) 作成

((追記 13) を再補正。全文補正)

補正第十六次稿：平成 30(2018)年 10 月 9 日(火)作成

((追記 14) を追加。全文補正)

補正第十七次稿：令和 4 (2022) 年 8 月 9 日 (火) 作成

(レイアウトを全面変更し、(追記 15) を追加の上、一部補正追加した。)

(本文)

今春（平成 19（2007）年）、武石和美氏（榕樹書林社長）¹「史料紹介『琉球封使録』」²に、その発行者である「須原鉄二」に関する興味深い記事が掲載され、久方振りに、「須原鉄二」の事を思い出した。

須原鉄二は、明治初期の有力版元であり、例えば、明治警察史関係の有名な著作である警視局編『警察集成』（全 3 冊、警視局蔵版。第 1 冊：明治 10 年 9 月 15 日出版版權届、明治 10 年 9 月刊、「警察集成序 大警視正五位川路利良撰」あり。第 2 冊：明治 10 年 9 月 15 日出版版權届、明治 12 年 7 月刊、第 3 冊：明治 13 年 5 月 13 日出版版權届、明治 13 年 3（マ）月刊）の発兌には「警視局御用書物師 東京西河岸町³十貳番地須原鉄二他」、田中耕造（1851～1883）纂訳『警察一斑』（警視局蔵版、明治 10 年 9 月 15 日刊）の発兌には「警視局御用御書物師 東京西河岸町十貳番地 須原鉄二 東京日本橋通一丁目 北畠茂兵衛⁴」、川路利良（1834～1879）述、吉村増雄注釈『警察手眼注釈』（明治 12 年 7 月刊）の出版人には「警視局御用書物師 須原鉄二 日本橋区西河岸町十二番地」、同書売弘書肆には「日本橋区通壱丁目 北畠茂兵衛、浅草区芽町貳丁目 北澤伊八」等とある。（この部分、平成 21 年 1 月 31 日、同 2 月 5 日一部補正）

このため、江戸時代以来の老舗書肆である須原屋の当主である「北畠茂兵衛」及びこの須原屋茂兵衛とともに『江戸名所図会』⁵の版元として著名な「須原屋伊八」のことである「北澤伊八」⁶はともかく、「須原鉄二」とは誰かが、多年の疑問であった。長く姓としての「須原」と江戸期有力書商「須原屋」の一統を結び付ける資料を、見出すことができずにいる⁷。また、内務省警視局の存置期間は、明治 10（1877）年 1 月～同 14（1881）年 1 月であるが、「内務省警視局御用御書物師」（あるいは「警視局御用書物師」）の実態についても、寡聞にして、記載文献を知らない⁸。

¹ 武石和美氏につき、『朝日新聞』平成 20 年 1 月 30 日夕刊第 1 面「ニッポン人脈記 わが町で本を出す④」参照。〈<http://bookjungle.ti-da.net/>〉（平成 20 年 2 月 1 日追加）

² 李鼎元著、原田禹雄氏（1927～）訳註『使琉球記』（沖縄・榕樹書林、平成 19 年 4 月 10 日刊）別添『がじゅまる通信』No.49（2007.4.10）。（平成 20 年 12 月 31 日追加）
〈<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/biblio/bib40-2/05.html>〉参照。

³ 関東大震災前は、日本橋川西河岸橋の南側を西河岸、北側を裏河岸といった。

⁴ 田山花袋（1872～1930）『東京の三十年』（博文館、大正 6 年 6 月 18 日刊。復刻版：『明治大正文学回想集成 2』（日本図書センター、昭和 58 年 4 月 25 日刊））5 頁（「その時分」）には、田山が明治 14（1881）年上京した当時の「須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛」等「古い大きな本屋」のことが記載されている。（平成 20 年 11 月 30 日追加）

⁵ 『江戸名所図会』について下記サイト参照。

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E5%90%8D%E6%89%80%E5%9B%B3%E4%BC%9A>〉

⁶ 「須原屋伊八」の店の最後については、反町茂雄（1901～1991）編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』（八木書店、平成 2 年 1 月 30 日刊）197、198 頁（田中菊雄（1860～1941）談）参照。同書は、『紙魚の昔がたり』（訪書会、昭和 9 年 10 月 25 日刊。再版：臨川書店、昭和 53 年 10 月 25 日刊（117、118 頁））を改編したものである。（平成 21 年 2 月 4 日追加）なお、高野嗣男編『須原屋の百年』（須原屋、昭和 51 年 11 月 10 日刊）165 頁には、「須原屋伊八こと北沢伊八の店は明和年間（1764～1771）の創業で、明治二十年代で閉業。」とある。（平成 21 年 2 月 15 日追加）

⁷ （追記）3、6、7、10 参照。（平成 21 年 3 月 21 日追加）

⁸ 江戸時代の御書物師は、幕府の御用達町人で、幕府の書物方に属して、将軍の文庫である紅葉山文庫の運営に携わった（藤實久美子（1964～）『江戸の武家名鑑 武鑑と出版競争』（吉川弘文館、平成 20 年 6 月 1 日刊）130 頁）ものであるから、維新後も同じような態様であったと推測される。なお、御書物師につき、福井保（1911～）『紅葉山文庫—江戸幕府の参考図書館—』（郷学舎、昭和 55 年 8 月 1 日）23、

因みに、国立国会図書館近代デジタルライブラリー〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉(⇒国立国会図書館デジタルコレクション〈<https://dl.ndl.go.jp/>〉)で検索すると、例えば「須原鉄二」で66件、「北畠茂兵衛」で60件(平成20年9月24日検索時点。なお、検索の仕方により多少の変化あり。)検出⁹され、この中に、内務省警視局関係のものも多数ある。よって、両氏は、明治初、中期では、大手の出版業者であったかと思われる。

これより先、江戸の書商については、例えば、矢島玄亮氏(1903～2001、東北大学附属図書館の著名な書誌学者)『徳川時代出版者出版物集覧』(徳川時代出版者出版物集覧刊行会、昭和51年8月30日刊)、同『徳川時代出版者出版物集覧 続編』(徳川時代出版者出版物集覧刊行会、昭和51年12月1日刊)、今田洋三(1933～)『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』(NHK ブックス 299、昭和52年10月20日刊。特に「V幕末の出版」(163～200頁))、佐藤敏夫(1915～1980)『江戸の本屋』上、下(中公新書、昭和55年2、3月25日刊)等に詳しい¹⁰。

周知のように、江戸時代の大書商に、有名な「須原屋」があり、「須原屋茂兵衛」がその代表的人物である。「北畠」は須原屋の本姓(出身地:和歌山県有田郡湯浅町栖原(昭和52年時点地名))であることから、この「北畠茂兵衛」は、須原屋第9代の充親¹¹であると思われる、「須原鉄二」は、おそらくこの「須原屋」の別家等の関係者かと推測される¹²。

江戸期の須原屋の歴史を詳細に辿った前掲今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』あとがき(205頁)には、「江戸にしても須原屋茂兵衛家のご子孫をお尋ねすることもおこたってしまっている。」とあり、明治期以降の須原屋及び「須原鉄二」探究は、なお今後の課題かと思われる¹³。

24 頁参照。(平成20年9月24日追加)

ちなみに、「ヨミダス歴史館」に拠れば、須原鉄二は、その後、「警視庁御用書物師」(例:明治17(1884)年10月11日広告)、「警視庁御用書林」(例:明治18(1885)年広告)の名称を名乗っており、また、競合他社であった博聞社が当時「文部省・司法省御用書林」といっているので、これらからすれば、根拠規定は未調査であるが、具体的には高額の抵当物を差し出して特に当該官庁蔵版書籍売捌を申し付けられた書肆という意味かと思われる((追記13)掲載の稲岡勝(1943～)「長尾景弼・股野[琢]兄弟と博聞社」『都留文科大学研究紀要』第63集(平成18年3月20日刊。)151(16)頁下段「御用書店」参照。)(平成24年1月8日追加、同年1月16日一部補正)

⁹ 国立国会図書館の図書検索では、須原鉄二(畏三堂)で80件、北畠茂兵衛(千鐘房)で90件検索できる(平成20年9月24日検索)。

¹⁰ 加えて、先頃、前掲藤實久美子『江戸の武家名鑑 武鑑と出版競争』(吉川弘文館、平成20年6月1日刊)が刊行されたが、代表的な武鑑版元であった須原屋について詳しい。(平成20年9月24日追加)

¹¹ 前掲今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』172頁「千鐘房須原屋北畠茂兵衛家系図」、同藤實久美子『江戸の武家名鑑 武鑑と出版競争』121頁参照。(平成20年9月24日追加)

¹² 長友千代治(1936～)『江戸時代の図書流通』(佛教大学通信教育部、平成14年10月1日刊)45頁は、「その須原屋姓を名乗って営業しているものは『改訂増補近世書林板元総覧』によれば、江戸と判明しているものだけでも三十九軒にのぼる。須原屋を名乗る地方の店は京都・大坂・静岡・水戸などに及んでいるが、これも一門であろう。」という。明治に入って、例えば、元老院蔵『法律格言』(明治11年5月印行。「日本立法資料全集」別巻361(信山社、平成17年8月15日復刊))は、奥付けに、「御用御書物師 東京錦屋町(現在の銀座四丁目のあたりか。)八番地 須原量坪 売捌所 同所 律書房」として、「須原量坪」の名を記載している。あるいは、この「須原量坪」も、須原屋の別家の一つだったのかも知れない。これは、明治期になって、屋号の「須原屋」を姓にしたものかと思われ、姓としての「須原」と書商「須原屋」探究の一つのよすがとなるかと思われる。ちなみに、同書の「売弘書肆」には、「北畠茂兵衛」、「須原鉄二」の名も出ている。(平成20年9月24日追加、同年12月31日一部修正)

¹³ 前掲今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』197頁によれば、「しかし、なお、江戸の書物屋たちは、自らの中に目ざめ切れぬものをもっていった。それは、明治の中ごろまでに、ほとんどが書物出版業者としては没落し去るという現象となってあらわれる。」とのことであるが、その頃になると、明治

(追記 1) 北畠茂兵衛経営須原屋の廃業

(平成 20 (2008) 年 2 月 1 日作成)

最近、知人より、東京書籍商組合編『東京書籍商伝記集覧 日本書誌学大系 2』(青裳堂書店、昭和 53 年 4 月 30 日刊)について教示を得た。

本書は、大正元(1912)年 11 月刊の東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』の影印版であるが、その 229 頁に「須原屋 鈴木莊太郎 初代(元治元(1864)年 1 月 1 日生) 東京市京橋区豊町 17 番地(註: 現中央区京橋三丁目)

創業明治 37 年 9 月」の記載がある。

それによると、鈴木莊太郎は、呉服業であったが、「偶々友人須原屋北畠茂兵衛ヨリ同店ノ監督ヲ依嘱セラレ、扔テ呉服業ヲ廃シ、(明治)三十一年ヨリ同店ノ支配ヲ担当ス。明治三十七年、同店書籍部ヲ閉鎖スルニ際シ、其ノ全部ヲ譲受ケ、同年十二月京橋区伝馬町三丁目ニ書籍業ヲ開始シ、其後現在地ニ移リ、………」とある。

これからすると、江戸以来の大書商として知られた「北畠茂兵衛」の須原屋は、明治 37 (1904) 年に廃業し、鈴木莊太郎に譲渡されたようであり、その後の須原屋は、従来の北畠一族とは別のものと見ることができる。

また、同書には、「須原鉄二」については何も記載されていないので、同氏の消息は、もとより不明であるが、国立国会図書館所蔵本による同氏の出版情報は明治 20 年前後で切れていること、かつ、大本の「北畠茂兵衛」が上記のようなことである以上、これより先に廃業したのか、逝去したのか、あるいは、「北畠茂兵衛」とほぼ同じようなことになったのではないのかと推測される¹⁴。

なお、上記鈴木莊太郎経営の須原屋書店は、国立国会図書館所蔵本検索(「書誌一覧」)で見える限りでは、建築関係のものが多く、昭和 16 (1941) 年頃まで出版活動をしていたようである。(この部分: 平成 21 年 2 月 7 日一部修正)

この他、井上隆明(1930～)『改訂増補 近世書林版元総覧 日本書誌学大系 76』(青裳堂書店、平成 10 年 2 月 28 日刊。初版は昭和 56 年 1 月刊。)393 頁は、北畠家による須原屋本家は、明治 37 (1904) 年九代で閉業し、支配人に譲渡、大正震災後に閉じた(ただし、この記述はやや疑問)とする。(この部分: 平成 21 年 1 月 8 日追加、同 21 年 2 月 7 日一部修正)

20 (1887) 年創業の博文館等明治新興出版業者が登場し、江戸の書商たちは明治 20 年代には没落していくようである。なお、平成 22 (2010) 年春刊行の田中康雄(1940～)編『江戸商家・商人名データ総覧』第 4 巻(し～と)(柊風社、平成 22 年 4 月 30 日刊)181～184 頁は、「須原・須原屋」を収録しており、貴重である

〈<http://www.shufusha.co.jp/document/shounin/>〉(「なお」部分、平成 24 年 1 月 8 日追加)。この他、(追記 1)、(追記 2) 参照。

¹⁴ 須原鉄二については、(追記 13) の内容も一つの参考になると考えられる。(平成 24 年 1 月 8 日追加)

(追記 2) 須原屋のその後

(平成 20 (2008) 年 12 月 9 日作成、同年 12 月 31 日一部修正)

須原屋のその後については、上記東京書籍商組合編『東京書籍商伝記集覧 日本書誌学大系 2』(青裳堂書店、昭和 53 年 4 月 30 日刊) 記載内容以上のことは、把握できていなかった。

こうした中で、平成 20 年 12 月 5 日(金)、東京古書会館で開催の「書窓会」古書市で、花咲一男(1919~2010)¹⁵『江戸のほんや其他 川柳江戸名物図絵 第 3 巻』(和装、近世風俗研究会、昭和 40 年自刊本)に、たまたま出遭った。

同書は、前掲今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』(NHK ブックス 299、昭和 52 年 10 月 20 日刊) 167、170 頁にも引用されているものであるが、怠慢から見ていなかった。同書には、須原屋に関する興味深いことが出ていたが、事情あって購入できなかったのも、早速、某図書館に赴き、改めて検索したところ、同館在庫の花咲一男『江戸川柳名物図会』(三樹書房、昭和 51 年 6 月 25 日刊。奥付では表題は「川柳江戸名物図会」となっており、ネットで見ると、最近では『川柳江戸名物図会』で市販されているようである。)に、上記『江戸のほんや其他』も、「補遺」付きで収載されていることが判明した。

そこで、これに基づき、「須原屋」に関し、必要な範囲で、抽出しておくことと、次のとおりである(144、145、補遺 294 頁)。

「・本家は日本橋通り 1 丁目にあった江戸屈指の出版商であった。

・分家・一族もかなりの数があったが、明治になって、博文館と教科書の入札を争い、敗れた[註 1: この「教科書入札」云々の件は不詳。]のをきっかけにとなり、衰微し、関東大震災に決定的打撃をうけて、遂に廃絶した[註 2: この「関東大震災」云々の件は不詳]。

・その跡を吊うものもなく、今、真宗大谷派・寿谷山・善龍寺(台東区西浅草 1-9-2)の無縁仏となっている。ただし、同寺の住職は、代々の大檀家であった須原屋の積徳のために、朝夕永代供養の香華と読経を絶していない[註 3: これは、花咲一男『江戸のほんや其他』が出た昭和 40 年頃の状況か?。ただし、前掲今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』170 頁以下は、善龍寺も調査した上で、北畠家の本拠地であった和歌山の菩提寺、墓所の詳細を記載している。]

上記記載は、おそらく北畠茂兵衛が経営した須原屋のことで、北畠から鈴木荘太郎に譲渡されてからの須原屋のことは、「関東大震災云々」のこののみと思われる。

(追記 3) 藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」について (1)

(平成 20 (2008) 年 12 月 31 日作成。(追記 7、10) 参照。)

¹⁵ 花咲一男氏は、著名な近世文化風俗研究家である。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%B1%E5%92%B2%E4%B8%80%E7%94%B7>

ネットによれば、平成 20 (2008) 年 12 月に、国文学研究資料館編『近世・近代の地主経営と社会文化環境―地域名望家アーカイブズの研究―』(名著出版、平成 20 年 12 月 10 日刊、A5・436 頁、定価 8,925 円〈本体 8,500 円+税〉) が刊行されたという
(<http://www.meicho.co.jp/?pid=11215758>)。

同書の第二部「地域文人論」中の「第四章」に、藤實久美子 (1964～)「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」が掲載され、内容は、「はじめに 1.江戸との複数のパイプ 2.須原鉄二について 3.本屋としての須原鉄二 4.書画骨董商としての須原鉄二 5.新・旧公債証書をめぐる情報 課題と展望―おわりにかえて―」とのことである(現物は、この時点では未見。⇒(補遺)その後、平成 21 (2009) 年 2 月 13 日に実見。(追記 10) 参照。)

藤實氏は、上述のように、『武鑑出版と近世社会』(東洋書林、平成 11 年 9 月刊)、『近世書籍文化論 史料論的アプローチ』(吉川弘文館、平成 18 年 1 月刊)、『江戸の武家名鑑 武鑑と出版競争』(吉川弘文館、平成 20 年 6 月 1 日刊)等の著者である。おそらく、今次御論説中で、「須原鉄二」について詳述されておられることと思われるので、同人については、これでおそらく判明したものと考えられる。ここでは、取り急ぎ、同稿の紹介のみをしておくこととする。

なお、北信濃の山田家につき、例えば (<http://muso.to/teienn-yamadake.htm>) 参照。

その後、藤實久美子氏表記論説の基となったと思われる藤實氏「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」『近世・近代の地主経営と地域社会文化論―地域アーカイブズの総合的調査研究を通して―(研究成果中間報告書)』(人間文化研究機構 国文学研究資料館、平成 19 (2007) 年 3 月 30 日刊)のことも知った。これにつき、(追記 7) 参照。(この部分: 平成 21 年 1 月 16 日追加)

更に、平成 21 年 2 月 13 日に、国文学研究資料館編『近世・近代の地主経営と社会文化環境―地域名望家アーカイブズの研究―』所収の藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」を見ることができた。これにつき、(追記 10) 参照。(この部分: 平成 21 年 2 月 15 日追加)

(追記 4) さいたま市浦和区の須原屋について

(平成 20 (2008) 年 12 月 31 日作成、平成 21 年 1 月 8、16、30 日、平成 24 年 1 月 8 日一部追加)

さいたま市浦和区に、明治以来の有名な書店である「須原屋」がある。

(<http://www.suharaya.co.jp/aboutus/index.html>)

同社については、尾崎秀樹 (1928～1999)・宗武朝子 (1918～) 編『日本の書店百年 明治・大正・昭和の出版販売小史』(青英舎、平成 3 年 7 月 19 日刊)中の「須原屋 浦和の発展と歩調をあわせ九十五年、伝統に新風を吹きこむ三代目」(115～122 頁)に詳しいが、元は浅草茅町の須原屋伊八(北澤伊八)が明治 9 (1876) 年 11 月に浦和宿で開業し

た須原屋書店であり、明治 14 (1881) 年に浅草須原屋より独立したものという。浦和の同店のことについては、夙に新井勉先生より御懇篤な御示教に与った。厚く御礼申し上げるものである。

なお、井上隆明 (1930～) 『改訂増補 近世書林版元総覧 日本書誌学大系 76』 (青裳堂書店、平成 10 年 2 月 28 日刊。初版は昭和 56 年 1 月刊。) 385、386 頁に、「須原屋伊八」のことが記載されている (この部分: 平成 21 年 1 月 8 日追加)。

その後、浦和の「須原屋」の社史として、高野嗣男編『須原屋の百年』 (須原屋、昭和 51 年 11 月 10 日刊。未見) のあることを知った (この部分: 平成 21 年 1 月 16 日追加)。本『須原屋の百年』については、平成 21 年 2 月 13 日 (金) に、実見することができた。ちなみに、「須原屋伊八」 (北澤伊八) 関係については、口絵諸頁、24、80～82、85、86、165 頁参照。これについては、改めて、別の機会に検討することとしたい。 (この部分: 平成 21 年 2 月 15 日追加)。

更に、田中治男『書店人国記』第 2 巻 (東販商事、昭和 55 年 7 月 31 日刊) 10～19 頁に、浦和の「須原屋」の沿革等が記されていることを知った。 (この部分: 平成 21 年 1 月 30 日追加)

平成 22 (2010) 年初頭、現地を実査した。 (この部分: 平成 24 年 1 月 8 日追加)

その後、登芳久 (1939～) 『書肆・須原屋茂兵衛 江戸期最大の出版業者の盛衰』 (雄文社出版企画、平成 16 年 9 月 1 日刊) に接したが、同書は、さいたま市「須原屋」に関連する著作でもある。 (この部分: 平成 24 年 1 月 16 日追加)

(追記 5) 小川菊松 (1888～1962) 『出版興亡五十年』 (誠文堂新社、昭和 28 年 8 月 5 日刊。復刻版: 平成 4 年 11 月刊。) にみる須原屋

(平成 21 (2009) 年 1 月 8 日作成)

同書 69、150 頁に、須原屋の記載あり。うち、69 頁 (「11 江戸時代から続いた老舗～今も残るは京阪地の仏書肆位か」) の関連記述は、次のとおりである。

「明和六〔1769〕年に青本を出した「すはらや」というのがある。これは私の至誠堂時代〔明治 37 (1904) 年 2 月～明治 45 (1912) 年 5 月〕に日本橋区通一丁目にあつた須原屋であろう〔須原屋は、鈴木莊太郎に移譲後は、明治 37 年 12 月に京橋区南伝馬町 3 丁目に移転し、その後京橋区豊町 17 番地に移ったという。〕。昔からあつた古い店だと聞いていたが、その頃は、大工さんに読ませる本などをポツ、ポツと出していたかと思うが、一向振わなかつたように記憶する。」

(追記 6) 井上隆明 (1930～) 『改訂増補 近世書林版元総覧 日本書誌学大系 76』 (青裳堂書店、平成 10 年 2 月 28 日刊。初版は昭和 56 年 1 月刊。) にみる須原鉄二

(平成 21 (2009) 年 1 月 8 日作成)

同書 385～394 頁に須原屋一統のことが記載されているが、390 頁に、「須原屋鉄二」のことが記されている。

「須原屋鉄二 畏三堂 江戸橋西河岸町 現故漢画名家集鑑（長島晨三 [マ、「畏三」の誤植。]）安政 5 序 羈旅漫録（馬琴）明治 18 合 [合梓のこと] 後 [マ]」

これよりすると、おそらく、須原屋鉄二が、明治になって、屋号を姓として須原鉄二となったものと考えられる。なお、堂号「畏三堂」は、あるいは、上記「長島畏三」と関連があるものかとも思われる。（追記 3）に記した藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」の早き閲読が要求されところである。⇒（補遺）藤實久美子氏の同稿によれば、「長島畏三」とは「須原鉄二」のこととの由である（285 頁）。（この部分：平成 21 年 2 月 15 日追加）。

（参考 1）nacsis webcat 事例

「現故漢畫名家集鑑 / 長島畏三述<ゲンコ カンガ メイカ シュウカン>. -- (BA 79304942)

[出版地不明]: [須原屋鉄二], 安政 5 [1858][序]

[18]折 ; 18.7×12.3cm

注記: 和漢古書につき記述対象資料毎に書誌作成 ; 刊本 ; 外題: 現故漢画

名家集覧 畏三蔵梓 ; 扉題: 現故漢畫名家集鑑 ; [序文末]: 安政五年戊午秋七月 東都

寫山奇樓 長島畏三述 ; 折丁 ; 和装本, 帙入り ; 印記あり:

「村石文庫」 「天正堂蔵書」

別タイトル: 現故漢画名家集鑑 ; 現故漢画名家集覧

著者標目: 長島, 畏三<ナガシマ, イゾウ>

（参考 2）Yahoo! オークション事例（平成 21 年 1 月 30 日追加）

<<http://page2.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/b92328919>>

「蔵出し・本・古本・古書・和本・現故漢画名家集鑑・安政五年」

入札期間: 平成??年 10 月 19 日～10 月 26 日 開始時価格: 20,000 円

現物は未見ではあるが、本 Yahoo! オークションの掲載写真によれば「畏三堂 須原屋鉄二」とある。

（参考 3）実物一例（平成 21 年 2 月 15 日追加）

（平成 21 年 2 月 14 日実見）

『現故漢畫名家集鑑』（[序文末]: 安政五年戊午秋七月）

序文には、長島畏三は本書に先立ち『本朝画録』なる書を編纂したとあるが、『本朝画録』は公刊されていない模様である。

巻末には、「東武西河岸 畏三堂 須原屋鉄二」とある。

（追記 7）藤實久美子「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」について

（平成 21（2009）年 1 月 16 日作成。（追記 3、10）参照。）

（追記 3）で記した藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」国文学研究資料館編『近世・近代の地主経営と社会文化環境—地域名望家アーカイブズの研究—』（名著出版、平成 20 年 12 月 10 日刊）については、お恥ずかしいことに、未だ見る機会を得ないが、最近、その前に出された藤實久美子氏の表記「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」『近世・近代の地主経営と地域社会文化論—地域アーカイブズの総合的調査研究を通して—（研究成果中間報告書）』（人間文化研究機構 国文学研究資料館、平成 19（2007）年 3 月 30 日刊）のことも知った。おそらく、上記「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」の基となったものと思われるが、小見出しは、「はじめに、1. 須原鉄二の屋号・堂号・居所など、2 司法省・警視庁書物師 畏三堂須原鉄二、3 書画会と畏三堂須原鉄二、4 新旧公債証書をめぐる情報、おわりに」であって、詳細に須原鉄二論を展開しておられ、驚くことが多い。これにより、本稿は、全面的に書き直す必要があるが、今はただこの紹介にとどめ、上記「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」を拝見した上で、稿を改めることとしたい。

（追記 8）葉多野太兵衛創業の清水書店の件¹⁶

（平成 21（2009）年 1 月 30 日作成）

（平成 21（2009）年 2 月 3 日補正）

（平成 21（2009）年 3 月 21 日再補正）

（平成 23（2011）年 1 月 9 日再々補正）

「（追記 3）、（追記 7）及び（追記 10）で言及した藤實久美子氏「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」『近世・近代の地主経営と地域社会文化論—地域アーカイブズの総合的調査研究を通して—（研究成果中間報告書）』（人間文化研究機構 国文学研究資料館、平成 19（2007）年 3 月 30 日刊）135 頁は、大正期の一流の法律書専門出版書店¹⁷であった清水書店（当時：神田区今川小路 2 丁目 47 番）の創業者葉多野太兵衛

¹⁶ （追記 8）については、平成 23（2011）年 1 月 8 日に、本 HP 別稿「清水書店とは何ぞ一須原鉄二との関連で— 明治・大正警察史の一齣—」（HP 初出：平成 23（2011）年 1 月 8 日（土）初稿作成）として、清水書店検討のものを作成した。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shimizushoten.pdf>

¹⁷ 例えば、小川菊松（1888～1962）『出版興亡五十年』（誠光堂新光社、昭和 28 年 8 月 5 日刊。復刻版：平成 4 年 11 月刊）154、155 頁参照。

18 (清水太兵衛、1868～1926) が明治十年代に須原鉄二の店に奉公していたことを誌している。これは、前記東京書籍商組合編『東京書籍商伝記集覧 日本書誌学大系 2』(青裳堂書店、昭和 53 年 4 月 30 日刊。東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』(大正元(1912)年 11 月刊)の影印版) 208 頁に依拠するものであるが、遺憾なことに、前に同書を見た時には見落としていた。ただ、同書は、葉多野太兵衛が「明治 15 年 4 月日本橋区西河岸町律書房須原鉄二に雇ハレ、勤続数年。」と誌しているが、須原鉄二の店の屋号は「畏三堂」であり、「律書房」は、例えば国会図書館近代デジタルライブラリー(<http://kindai.ndl.go.jp/>)によれば、須原量坪¹⁹とかその後を継承した大塚禹吉の店で、年代とか所在地も違う。同書は、各店提供の資料に基づいて編纂されたものとのことであり、何故唐突に「律書房」のことが出てくるのかは、不明である。あるいは、単純に、「律書房」は、「書肆」の誤植かも知れない。

葉多野太兵衛については、(二代)葉多野太兵衛(本名:巖)編『追悼録』(清水書店、昭和 3 年 11 月 8 日刊)があり、初代葉多野太兵衛が日本橋の須原屋で修業したことについては、巻頭墓碑銘写真、7、11、21、23、44、85 頁に記載されているが、須原鉄二その人に言及したものはない。巻頭掲載の墓碑銘によれば、葉多野太兵衛の雅号は「畏三」というが、これは、おそらく、須原鉄二店屋号の「畏三堂」に依拠するものかと思われる。

なお、国立国会図書館近代デジタルライブラリー(<http://kindai.ndl.go.jp/BIBibList.php>)に、『芝居茶話』(編集人須原畏三〈日本橋区西河岸町拾貳番地区〉、出版人清水太兵衛〈同区同町同番地須原鉄二方寄留〉、明治 20 年 7 月 18 日出版御届)なるものが見られる。この「清水太兵衛」は、後の「(初代)葉多野太兵衛」のことであるが、年代からして、(初代)葉多野太兵衛が須原鉄二の店に奉公していた時に、主人とともに刊行したものかと推測される。(この項:平成 21 年 3 月 21 日追加、平成 23 年 1 月 9 日補正)

この他、葉多野太兵衛については、反町茂雄(1901～1991)編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』(八木書店、平成 2 年 1 月 30 日刊) 211、212 頁(同書は、『紙魚の昔がたり』〈訪書会、昭和 9 年 10 月 25 日刊。再版:臨川書店、昭和 53 年 10 月 25 日刊〈129 頁〉〉を改編したものである。)に、深沢良太郎氏(?～1950、81 歳)との対談が掲載されている。ここでは、清水書店の創業者としての「清水太兵衛」と「金主」としての「葉多野太兵衛」という二つの名前が記載されており、当初はこの人物関連がよくわからなかったが、その後の調べでは、別人かと思われる²⁰(この部分:平成 23 年 1 月 9 日補正)。なお、鈴木徹造(1920～)『出版人物辞典 明治～平成 物故出版人』(出版ニュース社、平成 8 年 10 月 30 日刊) 241 頁参照。

18 ここにいう葉多野太兵衛は、元は清水太兵衛といい、明治 22 (1889) 年に清水書店を創業したが、明治 30 年頃、何か事情あって、「葉多野太兵衛(初代)」に改姓している人物である。(平成 23 年 1 月 9 日追加)

19 須原量坪につき、(本文)註 12 参照。

20 その後の検討の結果、ここにある「葉多野太兵衛」は、明治 20 年代初めに清水書店を創業し明治 30 年頃に同書店の(初代)葉多野太兵衛となった清水太兵衛とはまったく別人であることが判明した。然らば、この「金主」たる「葉多野太兵衛」とは一体誰なのかについては、遺憾ながら、未だ不明である。今後の検討課題である。(平成 23 年 1 月 9 日追加)

『東京古書組合五十年史』（発行者：井上周一郎、発行所：東京都古書籍商業協同組合、昭和 49 年 12 月 15 日刊）28、34 頁は、せどり界の雄であった塚富（塚本富三郎）のことを、葉多野太兵衛の同僚として、「西河岸須鉄の出身」と記載している。（この部分：平成 21 年 2 月 7 日追加）

（追記 9）国立国会図書館近代デジタルライブラリー本に見る須原鉄二の住所地

（平成 21（2009）年 2 月 5 日作成）

（平成 21（2009）年 3 月 21 日補正）

須原鉄二で不可解なことは、あれだけの大きな店であるにもかかわらず、明治 20（1887）年 12 月 23 日設立の「東京書籍出版営業者組合」の構成組合員（130 余名）に入っていないことである（『東京書籍商組合史』（東京書籍商組合事務所、昭和 2 年 6 月 15 日刊）10～15 頁参照。）。同組合に、千鐘房北畠茂兵衛は入っているが、この時期、畏三堂須原鉄二は、下記のように、まだ活動していたと見られるのに、何故か入っていない。要検討事項の一つである²¹。

それはさておき、ここでは、国立国会図書館近代デジタルライブラリー本〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉に拠り、須原鉄二の店の住所地の変遷を辿っておくこととする。

上記近代デジタルライブラリーで「須原鉄二」で検索して見ることができる最後年のものは、『明治十九年 警察令全書』（警視庁蔵版、明治 20 年 2 月 25 日出版届、東京日本橋区西河岸町拾貳番地 警視庁御用書物師 須原鉄二）である。

次に、「畏三堂」で検索して見ることができる後年のものを見てみると、例えば、次のとおりである。

・三幣直和『政党各論』（須原畏三堂、明治 22 年 6 月 29 日刊）は、発行者内沢安二郎（日本橋区本石町 1 丁目貳十五番地須原鉄二方寄留）、印刷者須原鉄二（日本橋区本石町 1 丁目貳十五番地）とある。須原鉄二は、慶応年間（藤實久美子氏「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」『近世・近代の地主経営と地域社会文化論—地域アーカイブズの総合的調査研究を通して—（研究成果中間報告書）』（人間文化研究機構 国文学研究資料館、平成 19（2007）年 3 月 30 日刊）127、128 頁参照。）以来長く日本橋区西河岸町拾貳番地で営業していたが、ここでは、住所が日本橋区本石町 1 丁目貳十五番地に変わっており²²、また、何故か「須原鉄二方寄留内沢安二郎」なる人物が登場している。

²¹ 須原鉄二のその頃の置かれた状況については、（追記 13）が参考になるとと思われる。（平成 24 年 1 月 16 日追加）

²² （追記 13）に拠れば、本石町 1 丁目貳十五番地には遅くとも明治 21（1888）年 11 月 28 日以前に変わっているが、同地に移る前にまず西河岸町十七番地へ転居している。すなわち、下記『読売新聞』明治 21（1888）年 3 月 8 日（木）朝刊 4/4 頁及び明治 21（1888）年 3 月 13 日（火）朝刊 4/4 頁（同文。斜線は記事の改行個所を示す。）に拠ると、この時期須原鉄二は破産に近い状態となり、長年の営業地であった西河岸町十二番地から西河岸町十七番地へ転居していたことが判明する。（平成 24 年 1 月 31 日追

ちなみに、藤實久美子氏前掲論説 128 頁、140 頁註 (13) は、「内沢」について記載されておられるが、この「内沢安二郎」とは誰か、これまた要解明事項である²³。

・伊藤祐愛編『警官必携』(畏三堂、須原鉄二、明治 23 年 3 月 26 (?) 日刊) の発行者住所は、東京京橋区西紺屋町 (現在の銀座周辺) 6 番地を手書きで消して日本橋区本石町 1 丁目廿五番地とある。京橋区西紺屋町 6 番地に移る予定が、その時点では移転していなかったものかと思われる。

・三雲敬一郎『帝国民事刑事訴訟手続』(発兌: 畏三堂、旭昇堂、明治 24 年 5 月 27 日刊) では、京橋区西紺屋町 6 番地とある。同地に転居したのであろう。

この他、須原鉄二の出版物の最後のものは何かであるが、前掲藤實久美子氏前掲論説 130 ~135 頁は、「表 1 畏三堂須原鉄二発行・発売・売捌書目」145 点 (補遺: ただし、同氏「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」では、その後判明の『現故漢画名家集鑑』を加えて 146 点とする。) を記載しており、その中で、刊行年代の確認ができるものは、明治 33 (1900) 年刊の『扶桑書画款印集覧』とされる。ただし、藤實氏は、上記書目第 142 点で、同書には、明治 26 年 5 月刊のものがあるとしておられる (国会図書館本は明治 26 年 5 月刊)。いずれも未見であり、早急にこれら各版の奥付を確認する必要がある。

加えて、ネット掲載の古書では、発行は東洋堂であるが、例えば、三密堂書店のものは「須原畏三、東陽堂、全四冊、明治 40 年」、静岡・安川書店のものは「須原畏三、東陽堂、全四冊、明治 45 年」、を掲載している。

・三密堂書店関係分: <<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/sanmitu/1502.html>>

・静岡・安川書店 (平成 16 年 11 月現在) 関係分

<<http://kizun.plala.jp/yasukawa/books.html>>

加)

「 広告

| 今般示談の上博聞社へ/弊社蔵版の書籍譲渡し候/処同社に於て弊社廃業の様広告有之候得共決して/廃業は不仕左の処へ移住仕営業罷在候且警視庁御/用書林は依然として従前/の通りに有之候間江湖の/読者倍旧の愛顧を垂れ賜/はんことを此に広告候也

(小文字) 東京日本橋区西河岸町十七番地 」

²³ (補説 1) その後拝見した藤實久美子氏「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」国文学研究資料館編『近世・近代の地主経営と社会文化環境—地域名望家アーカイブズの研究—』(名著出版、平成 20 年 12 月刊) 285 頁は、須原鉄二の名字は「長島」とされておられ、「内沢」は、須原鉄二本人とは関係ないのかも知れない (この部分: 平成 21 年 2 月 15 日追加)。(補説 2) 更に、(追記 8) で言及した『芝居茶話』(編集人須原畏三 (日本橋区西河岸町拾貳番地区)、出版人清水太兵衛 (同区同町同番地須原鉄二方寄留)、明治 20 年 7 月 18 日出版御届) を例にとると、「清水太兵衛」は当時須原鉄二の店に奉公していた後年の「葉多野太兵衛」のことであることからして、ここにある「内沢安二郎」も、あるいは須原鉄二の店の奉公人であった可能性がある。なお、『芝居茶話』といい、『政党各論』といい、出版人 (発行者) に、自家寄留の他人の名義を使用した理由については別の問題である。(この部分: 平成 21 年 3 月 21 日再追加)。この問題も、須原鉄二のその頃置かれた状況に関する (追記 13) が一つの参考になるかとも思われる。(平成 24 年 1 月 16 日追加)

(追記 10) 藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」について (2)
(平成 21 (2009) 年 2 月 15 日作成。(追記 3、7) 参照。)

「(追記 3) 藤實久美子「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」について (1)」
(平成 20 (2008) 年 12 月 31 日作成) で言及した同稿については、平成 21 年 2 月 13 日、
知人の配慮で、漸く拝見することが出来た。

(追記 7) で触れた御前稿「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書
情報」以降の御成果をも踏まえ、須原鉄二について詳細な解明をされたものであり、寔に
貴重なものである。

今後は、藤實氏のこの二つの御玉稿をベースにして、須原鉄二検討を進めていく必要が
ある。

(追記 11) 須原鉄二出版「現故書画半切価格」について
(平成 21 (2009) 年 2 月 15 日作成)

上記藤實久美子氏御玉稿によれば、須原鉄二は、本屋としての他に、書画骨董商として
も著名であるとのことであるが、平成 21 年 2 月 14 日 (土)、たまたま須原鉄二出版の「現
故書画半切価格」なる一枚紙を見る機会を得た。

これは、現存者、故人の書画の反切価格一覧表(「価本金五枚」等を記載)であるが、末
尾に次のような記載がある。

須原鉄二検討には、書画骨董商方面のことをも踏まえていく必要がある。

東京西澁畏三述(註:「澁」は水際、岸のこと)

明治十六年九月五日御届

同 十月一日出版

東京府平民

編輯人 須原畏三

日本橋区西河岸町十二番地

出版人 須原鉄二

同区同町同番地

(定価金十銭)

(追記 12) 尾崎富五郎編『諸品商業取組評 初編』(明治 12 年 4 月刊)(『東京雷名商家番
付表 明治 12 年板』)について

(平成 21 (2009) 年 3 月 21 日作成)

最近ある古書展で、尾崎富五郎編『東京雷名商家番付表 明治 12 年板』（太平文庫 28、村山文彦解説、太平書屋、平成 6（1994）年 9 月復刻）を見かけた。同書は、横浜野毛の尾崎富五郎²⁴編で、原題を『諸品商業取組評 初編』（明治 12 年 4 月刊）、『食類商業取組評 二編』（明治 12 年 4 月刊）という木版本 2 冊物の番付表²⁵であるが、この表題からは内容がわかりにくいということから、合本復刻に際して、表記のように改題されたものである。

このうち、『諸品商業取組評初編』収録の「書籍」（復刻本 19 頁）中に、須原屋一統のものとして、「年寄 芽丁 須伊」²⁶、「勸進元 通一 須原茂²⁷」、「小結 通四 須原佐」及び「前頭 西ガシ 須原鉄」の名がある。

「芽丁 須伊」は、浅草区芽町の須原屋伊八（北澤伊八）、「通一 須原茂」は、日本橋区通一丁目の須原屋茂兵衛（北畠茂兵衛）、「通四 須原佐」は、日本橋区通四丁目の須原屋佐助²⁸であり、「西ガシ 須原鉄」が、須原鉄二その人である。当時の書籍商界における須原鉄二の位置付けを知り得る資料といえる。

この他、本『番付表』は、極めて興味深い内容を多々有するが、ここでは、その紹介のみに止めておく。

（追記 13）「ヨミダス歴史館」、「聞蔵Ⅱビジュアル」に見る明治 21（1888）年以降の須原鉄二関係記事について

（平成 24（2012）年 1 月 8 日作成、同年 1 月 16 日追加）

「ヨミダス歴史館」（須原鉄二分 135 件）及び「聞蔵Ⅱビジュアル」（須原鉄二分 34 件）中に明治 20（1887）年以降の須原鉄二に関する興味深い『読売新聞』、『朝日新聞』広告記事等があるので、取り敢えず採録しておく。当時の競合他社である博聞社²⁹と何らかの

²⁴ 尾崎富五郎（五葉舎万寿老人）については、同書村山文彦解説 6 頁参照。同氏は、横浜絵地図でも有名な人物である。

〈<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/document/map/index.html>〉

²⁵ これらは、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「住田文庫」で見ることができる

〈<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sumita/index.html>〉。『諸品商業取組評初編』につき、

〈<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/sumita/00020245/>〉参照。この他、下記参照。

〈<http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/library/memory5.html>〉

²⁶ 須原屋伊八（北澤伊八）については、例えば、（本文）註 6、（追記 4）参照。

²⁷ 須原屋茂兵衛（北畠茂兵衛）については、例えば、（本文）、（追記 1）参照。

²⁸ 須原屋佐助は、和紙の老舗「榛原」（中央区日本橋 2-7-6）の祖という。

〈<http://www.haibara.co.jp/history.shtml>〉参照。

²⁹ 本（追記 13）（平成 24（2012）年 1 月 8 日作成）作成時点では、本註につき、「明治前期の大出版社であった博聞社も警察関係の多数の書籍を刊行しており、その検討が必須であるが、同社については、既に稲岡勝（1943～）「長尾景弼・股野〔琢〕兄弟と博聞社」『都留文科大学研究紀要』第 63 集（平成 18 年 3 月刊。未見。）があり、稲岡氏は、平成 18（2006）年 4 月 21 日に日本出版学会歴史部会で「長尾景弼と博聞社一創業期を中心に」を報告されているとのことである。

〈<http://www.shuppan.jp/bukai11/67---2006421.html>〉と記載したが、その後、様々なことが判明したので、下記のように差し替えておきたい。

「明治前期の大出版社であった博聞社も警察関係の多数の書籍を刊行しており、その検討が必須であるが、同社については、既に稲岡勝（1943～）「長尾景弼・股野〔琢〕兄弟と博聞社」『都留文科大学研究紀要』第 63 集（平成 18 年 3 月 20 日刊。）166（1）～142（25）頁があり、加えて、稲岡氏は、当時平

揉め事があったこと等が判明し、その後の須原鉄二検討の参考になるものと思われる。

「ヨミダス歴史館」：〈<http://www.yomiuri.co.jp/rekishikan/>〉

「聞蔵Ⅱビジュアル」：〈<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>〉

⇒「朝日新聞クロスサーチ」（令和 4（2022）年 8 月 9 日追加）

〈<http://www.asahi.com/information/db/2022renewal/>〉

・『読売新聞』明治 21（1888）年 3 月 8 日（木）朝刊 4/4 頁及び明治 21（1888）年 3 月 13 日（火）朝刊 4/4 頁（同文。斜線は記事の改行個所を示す。）

「 告 白 」

― 今般示談の上博聞社へ/弊店蔵版の書籍譲渡し候/処同社に於て弊店廃業の様廣告有之候
得共決して/廃業は不仕左の処へ移住仕営業罷在候且警視庁御/用書林は依然として従前/の
通りに有之候間江湖の/読者倍旧の愛顧を垂れ賜/はんことを此に広告候也

（小文字）東京日本橋区西河岸町十七番地

警視庁 御用書林 須原鉄二

（博聞社は、「聞蔵Ⅱ」等によれば、当時「文部省・司法省御用書林」を名乗っていたことがわかる。また、『読売新聞』明治 25（1892）年 9 月 1 日（木）朝刊 2/4 頁に拠れば、「博聞社差し押さえ事件和解」の記事があり、その頃の同社の苦境も窺える³⁰。）

・『読売新聞』明治 21（1888）年 11 月 28 日（水）朝刊 4/4 頁（広告欄。斜線は記事の改行個所を示す。）

「古本買入」

並古代絵画買入

何書を不問御不用御払/之節は遠路多少とも御/報次第直に参館精々高/価に御引受可申候間
陸/続御申込伏て奉願上候

日本橋区本石町一丁目廿五番地

須原鉄二

・『東京朝日新聞』明治 22（1889）年 3 月 13 日朝刊 3 頁「畏三堂 須原」での記載あり。

成 18（2006）年 4 月 21 日に日本出版学会歴史部会で「長尾景弼と博聞社―創業期を中心に」を報告されているとのことである（長尾景弼：?～1895、股野琢：1838～1921）。

〈<http://www.shuppan.jp/bukai11/67---2006421.html>〉

上記「長尾景弼・股野〔琢〕兄弟と博聞社」145（2）頁は、「〔博聞社は、〕この間、警視庁御用書肆として法律書など類似の出版を競った須原鉄二が破産し、その財産を買収して業務の拡充もはかっている。今般当社於て日本橋西河岸須原鉄二所有ノ家屋並ニ版權書籍共一切買受ケ且同家ニテ従来取扱ヒタル警視庁御蔵版ノ専売モ併テ引受ケタルニ付倍々勉強シ以テ社業ヲ拡張セントス依テ売切レノ書籍ハ之ヲ増刷シ更ニ低価ヲ以テ発売ス伏テ倍旧ノ御愛顧ヲ乞フ」（『時事新報』明治廿一年三月六日 六面）この記事の後に買受けた四十点近い書目が並んでいるが、中に馬琴〔滝沢馬琴：1764～1848〕『羈旅漫録』三冊、『四書京伝余師』〔山東京伝：1761～1816〕の二冊があるのが面白い。」と述べている。現在『時事新報』明治廿一年三月六日記事は未見であって再確認の必要があるが、本記事は、下記『読売新聞』明治 21（1888）年 3 月 8 日（木）、同 3 月 13 日（火）朝刊掲載の須原鉄二記事の端緒となったものと思われ、破産云々はともかくとして、この時期に須原鉄二が大きな打撃を被ったことは明らかである。今後は、このあたりから、須原鉄二の後半生を検討していく必要があると思われる。（平成 24 年 1 月 16 日補正、追加）

³⁰ 前掲稲岡勝「長尾景弼・股野〔琢〕兄弟と博聞社」『都留文科大学研究紀要』第 63 集 144（23）～143（24）頁参照。（平成 24 年 1 月 16 日追加）

(平成 24 年 1 月 31 日追加)

- ・『東京朝日新聞』明治 22 (1889) 年 6 月 19 日 (水) 朝刊 4 頁 (同 20 日、同 21 日も同じ)「畏三堂 須原」(日本橋区本石町一丁目)での記載あり。(平成 24 年 1 月 31 日追加)
- ・『東京朝日新聞』明治 26 (1893) 年 4 月 14 日 (金) 朝刊 3 頁 6 段 (広告欄。斜線は記事の改行個所を示す。)

「鉄二の書画会

書肆にて知られし畏三堂須原/鉄二には来る十五十六の両日浅草須賀町の欧遊館に/於て催し当日は有名家の出席ある由」

(追記 14)『東京百事便』に見たる須原鉄二その他について

(平成 30 (2018) 年 10 月 9 日追加)

- ・『東京百事便』(三三文房、明治 23 年 7 月 9 日刊) 614 頁 (国会図書館デジタルコレクション 318 コマ) 所載「書画骨董舗」中「書画」に「須原鉄二 神田区錦町三丁目三番地」に記載がある。この時点では同地に店舗を有していたものか。

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991721/336>〉

なお、『東京百事便』の作成法については下記参照。

〈<https://fujimizaka.wordpress.com/2016/02/03/luxun-29/>〉

⇒幸田露伴 (1867～1947)「書生商人」『露伴集』第 1 卷 (春陽堂、明治 44 年 1 月 1 日刊) 353～369 頁 (国会図書館デジタルコレクション 180～188 コマ)、特に 365～367 頁 (同 186～187 コマ) 参照。文中『東京通鑑』が『東京百事便』のこととの由。

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/888707/180>〉

- ・「須原鉄二と清水書店創業者葉多野太兵衛について—明治・大正期出版業者史の一齣—」『法史学研究会会報』第 20 号 (平成 29 年 3 月 25 日刊) 90～94 頁

〈<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021240226/>〉

(追記 15) (再録)「須原鉄二と清水書店創業者葉多野太兵衛について—明治・大正期出版業者史の一齣—」『法史学研究会会報』第 20 号 (平成 29 年 3 月 25 日刊) 90～94 頁 (【叢説】) 〈<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021240226/>〉

(令和 4 (2022) 年 8 月 9 日追加)

須原鉄二と清水書店創業者葉多野太兵衛について
—明治・大正期出版業者史の一齣—

一 はじめに

戦前期警察史探求の一環として以前『警察協会雑誌』³¹を検討した際に須原鉄二（畏三堂、(? ~ ?)), 博聞社（創業者 長尾景弼 (? ~ 1895)), 警眼社（創業者 田山宗堯 (1859 ~ 1917)), 清水書店（創業者 葉多野太兵衛 (1868 ~ 1926)), 松華堂書店（創業者 横尾留治 (1864 ~ ?)), 法制時報社（創業者 小池則之 (1883 ~ 1941)）等往時の法律関係出版社についても併せ初歩的調査をする機会を得た³²。これらは、ある時期には警察関係書籍も含め我が国法律書出版にそれなりの地歩を占めた書店であるが、本稿ではそのうち須原鉄二及び最初同人の下で修業の後清水書店を創業した葉多野太兵衛について覚書風にその一端を紹介しておくこととする。

もとより戦前期の法律書、警察関係書出版業史については、本来ならば当該時期出版業史全体の中で検討すべきであるが、今回はまったく自己の興味あることだけに言及するにとどめざるを得なかったことをお断りしておく。

二 須原鉄二

須原鉄二は、畏三堂なる屋号を使用していることもあるが、「須原鉄二」の名で多くの書籍を刊行した明治前期の有力版元である。有名な須原屋の一統で本家の北畠茂兵衛とは共同出版をかなりしている。なお、須原鉄二は当初は「長島鉄二」であった可能性が強い（後掲藤實久美子氏論説参照）。ちなみに、明治警察史関係の有名な著作である警視局編『警察集成』全3冊³³（「警察集成序 大警視正五位川路利良撰」あり）の発兌欄には、

警視局御用書物師 東京西河岸町十貳番地須原鉄二他

と記され、田中耕造（1851 ~ 1883）纂訳『警察一斑』（警視局蔵版、明治10年9月15日刊）の発兌欄には、次のように見える。

警視局御用御書物師 東京西河岸町十貳番地 須原鉄二 東京日本橋通一丁目 北畠茂兵衛

また、川路利良（1834 ~ 1879）述、吉村増雄注釈『警察手眼注釈』（明治12年7月刊）の出版人として、

警視局御用書物師 須原鉄二 日本橋区西河岸町十二番地

と記されており、同書売弘書肆として、

日本橋区通壺丁目 北畠茂兵衛、浅草区芽町貳丁目 北澤伊八

とある。

³¹ 全529号、明治33（1900）年6月 ~ 昭和23（1948）年6月刊。同誌については警察政策学会警察史研究部会・公益財団法人警察協会編『警察協会雑誌目次集＝警察政策百年の論述＝』（警察政策学会資料・別刷、警察政策学会・公益財団法人警察協会、平成25年12月刊）、廣瀬權「『警察協会雑誌の謎』解明に向けた一歩」『警察学論集』第67巻第8号（平成26年8月10日刊）97 ~ 114頁参照。なお、別に公益財団法人警察協会HPにHP用「目次集」がアップされている。（<http://www.keisatukyoukai.or.jp/>）

³² 一部ではあるが（<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>）中の「法制史学者著作目録選（WEB版）」（⇒「明治警察史コーナー」）参照。

³³ 警視局蔵版。第1冊は明治10年9月15日出版版權届、明治10年9月刊、第2冊は明治10年9月15日出版版權届、明治12年7月刊、第3冊は明治13年5月13日出版版權届、明治13年3（マ）月刊である。

須原鉄二については、武鑑の研究で著名な藤實久美子氏の論考に「信州中野山田庄左衛門家と畏三堂須原鉄二と旧藩公債証書情報」³⁴及び「畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家」³⁵があって詳しい。うち後者の内容は、「はじめに 1.江戸との複数のパイプ 2.須原鉄二について 3.本屋としての須原鉄二 4.書画骨董商としての須原鉄二 5.新・旧公債証書をめぐる情報 課題と展望—おわりにかえて—」であるが、須原鉄二の主要なことはこれでほぼ判明する。

ただ、このように明治初めから同十年代には大きな活躍をした須原鉄二についてはその後のことが不明であったが、例えば「ヨミダス歴史館」及び「聞蔵Ⅱビジュアル」中に明治 20（1887）年以降の須原鉄二に関する興味深い『読売新聞』、『朝日新聞』広告記事等がある。これを見ると、当時の競合他社である博聞社と何らかの揉め事があったこと等が判明し、その後の須原鉄二検討の参考になるものと思われる。

明治前期の大出版社であった博聞社も警察関係の多数の書籍を刊行している。有名なものとして、ヘーン（1839～1892）著、湯目補隆（1858～？（昭和 10 年代初）⇒1858～1936）等訳『警察講義録』³⁶がある。同社については、既に稲岡勝氏に「長尾景弼・股野兄弟と博聞社」という論考³⁷があり、加えて、同氏は当時平成 18（2006）年 4 月 21 日に日本出版学会歴史部会で「長尾景弼と博聞社—創業期を中心に」を報告されているとのことである³⁸。

上記「長尾景弼・股野兄弟と博聞社」には、須原鉄二に関して次の記述が見られる（22 頁）。

この間、警視庁御用書肆として法律書など類似の出版を競った須原鉄二が破産し、その財産を買収して業務の拡充もはかっている。

今般当社於テ日本橋西河岸須原鉄二所有ノ家屋並ニ版權書籍共一切買受ケ且同家ニテ従来取扱ヒタル警視庁御蔵版ノ専売モ併テ引受ケタルニ付倍々勉励シ以テ社業ヲ拡張セントス依テ売切レノ書籍ハ之ヲ増刷シ更ニ低価ヲ以テ発売ス伏テ倍旧ノ御愛顧ヲ乞フ
（『時事新報』明治廿一年三月六日 六面）

この記事の後に買受けた四十点近い書目が並んでいるが、中に馬琴〔滝沢馬琴：1764～1848〕『羈旅漫録』三冊、『四書京伝余師』〔山東京伝：1761～1816〕の二冊があるのが面白い。

ここに引用された『時事新報』の記事は、下記『読売新聞』明治 21（1888）年 3 月 8 日（木）、同 3 月 13 日（火）朝刊掲載の須原鉄二関係記事の端緒となったものと思われ、須原鉄二の破産云々はともかくとして、この時期に同人が大きな打撃を被っていたことが知られる。今後は、このあたりから須原鉄二の後半生を探求していく必要があるかと思われる。

『読売新聞』明治 21 年 3 月 8 日朝刊 4/4 頁及び明治 21 年 3 月 13 日朝刊 4/4 頁（／は

³⁴ 『近世・近代の地主経営と地域社会文化論—地域アーカイブズの総合的調査研究を通して—（研究成果中間報告書）』（人間文化研究機構 国文学研究資料館、平成 19（2007）年 3 月 30 日刊）所収。

³⁵ 国文学研究資料館編『近世・近代の地主経営と社会文化環境—地域名望家アーカイブズの研究—』（名著出版、平成 20 年 12 月 10 日刊）所収。

³⁶ 警官練習所蔵版、博聞社、明治 19（1886）年 6 月刊（平成 19（2007）年 6 月に信山社より復刻版刊）。

³⁷ 『都留文科大学研究紀要』第 63 集（平成 18 年 3 月 20 日刊。）（1）～（25）頁。

³⁸ 日本出版学会 HP 〈<http://www.shuppan.jp/bukai11/67---2006421.html>〉参照。

記事の改行個所を示す、以下同じ)。

広 告

今般示談の上博聞社へ／弊店蔵版の書籍譲渡し候／処同社に於て弊店廃業の様広告有之候得共決して／廃業は不仕左の処へ移住仕営業罷在候且警視庁御／用書林は依然として従前／の通りに有之候間江湖の／読者倍旧の愛顧を垂れ賜／はんことを此に広告候也

東京日本橋区西河岸町十七番地

警視庁 御用書林 須原鉄二

ちなみに、その後、博聞社は、『読売新聞』明治 25 (1992) 年 9 月 1 日(木)朝刊 2/4 頁に拠れば「博聞社差し押さえ事件和解」の記事があり、今度はその頃の同社の苦境も窺える。

明治 21 (1988) 年秋には、須原鉄二については出版広告でなく、下記「古本・古代絵画買入」広告が出ている。以下では併せその後の記事をも掲げておく。

・『読売新聞』明治 21 年 11 月 28 日(水)朝刊 4/4 頁広告欄には、次の記事が見られる。

古本買入

並古代絵画買入 何書を不問御不用御払／之節は遠路多少とも御／報次第直に参館精々高／価に御引受可申候間陸／続御申込伏て奉願上候 日本橋区本石町一丁目廿五番地 須原鉄二

・『東京朝日新聞』明治 22 (1889) 年 3 月 13 日朝刊 3 頁には、「畏三堂 須原」での記載あり。

・『東京朝日新聞』明治 22 年 6 月 19 日(水)朝刊 4 頁 (同 20 日、同 21 日も同じ) には、「畏三堂 須原」(日本橋区本石町一丁目) での記載あり。

更に、明治 26 (1893) 年春には下記のような「書画会」の広告が出ている。

・『東京朝日新聞』明治 26 年 4 月 14 日(金)朝刊 3 頁 6 段広告欄には、次の記事が見られる。

鉄二の書画会 書肆にて知られし畏三堂須原/鉄二には来る十五十六の両日浅草須賀町の欧遊館に／於て催し当日は有名家の出席ある由

これらからすると、須原鉄二は明治二十年代年初め頃には出版社の経営はかなりの苦境に追い込まれており、その後は出版を罷め、古書とか書画の売買をしていたのではないかと思われる。いずれにせよ、同人のその後の動静は現時点では残念ながら不明である。ある時期須原鉄二と相競った博聞社もまたしかりであって、同社経営再建中の明治 28 (1895) 年 2 月 6 日に長尾景弼は死去する。このあたりから明治期の法律関係出版社にも大きな世代交代が見られるところであるといえよう。

三 清水書店創業者葉多野太兵衛

清水書店(所在地: 神田区今川小路 2 丁目 47 番) は明治中期に創業し、明治末期から大正期には一流の法律書出版社になっていた³⁹。大正 12 (1923) 年 9 月 1 日発生の関東大

³⁹ 例えば、小川菊松 (1888~1962) 『出版興亡五十年』(誠光堂新光社、昭和 28 年 8 月 5 日刊。復刻版: 21/25)

震災では大きな被害を受けたが、震災後は経済商工書分野にも更に進出しようとしていた。しかるに、大正 15（1926）年 6 月 26 日に創業者の初代葉多野太兵衛（1868～1926）が逝去したこともあってか、その後社業を完全に回復できず、昭和十年代後半からは法律書の出版も少なくなり、おそらく昭和二十年代前半には廃業したものと思われる。なお、先年幸いにも同書店及び創業家の内輪のこと等につきさる同書店関係者御後裔の方より種々貴重なお教えを受ける機会を得た。同氏に厚く御礼申し上げるものである。

清水書店に関して、東京書籍商組合編『東京書籍商伝記集覧 日本書誌学大系 2』⁴⁰は、創業者葉多野太兵衛が明治十年代に須原鉄二の店に奉公していたことを誌している。葉多野太兵衛は、元は清水太兵衛といい、明治三十年頃何か事情あって、「葉多野太兵衛（初代）」に改姓している人物である。ちなみに、国立国会図書館デジタルコレクション〈<http://www.ndl.go.jp/>〉によると、『芝居茶話』という書物は次のような奥書を持つ。

編集人須原畏三（日本橋区西河岸町拾貳番地区）、出版人清水太兵衛（同区同町同番地 須原鉄二方寄留）、明治 20 年 7 月 18 日出版御届

この「清水太兵衛」は、おそらく「葉多野太兵衛」のことと思われるが、年代からして、葉多野太兵衛が須原鉄二の店の奉公時に主人とともに刊行したものかと推測される。

葉多野太兵衛については、（二代）葉多野太兵衛（本名：巖）編『追悼録』（清水書店、昭和 3 年 11 月 8 日刊）があつて多くを知り得るが、初代葉多野太兵衛が日本橋の須原屋（マ）で修業したことについては、口絵墓碑銘写真および同書 7、11、21、23、44、85 頁に記載されている。ただ、残念なことに須原鉄二その人に言及した記述はない。上記墓碑銘によれば、葉多野太兵衛の雅号は「畏三」というが、これはおそらく須原鉄二が使用していた「畏三」とか同店屋号の「畏三堂」に由来するものかと思われる。

同書店の創業は、上記『東京書籍商伝記集覧』に、葉多野太兵衛は「都下須原屋書林（マ）に入り、師弟となり」とあり、また、

明治 22 年 2 月我国立憲節の日をトし、君〔太兵衛〕も亦独立して清水書店と号し、
当時の今川小路に居を定め専ら法律経済の書目の出版及販賣の業を創めたり

とあるように（同書 11～12 頁）、明治 22(1889)年 2 月である。この頃から、須原鉄二や博聞社に替わって、有斐閣（最初有史閣として明治 10（1877）年創業）や清水書店等の活躍が始まることとなる。清水書店の廃業年月については詳細不明であるが、例えば、国立国会図書館蔵書検索や CiNii 等で見る限りでは、昭和 23 年発行分が最後であるので、それ以降の時期と思われる。ちなみに、HP「奥付検印紙日録」（2007.10-01）〈<http://d.hatena.ne.jp/spin-edition/200710>〉には、

山崎 宏編著 東洋史上の古代日本、昭和 23 年 3 月 5 日刊、東京都千代田区神田神保町三丁目十三番地、合資会社 清水書店、発行者 代表社員 葉多野太兵衛
の紹介がある。

この他、葉多野太兵衛について記載したものに言及すると、例えば下記があげられる。

・反町茂雄（1901～1991）編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』（八木書店、平成 2 年 1 月

平成 4 年 11 月刊）154、155 頁参照。

⁴⁰ 青裳堂書店、昭和 53 年 4 月 30 日刊。（東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』（大正元年 11 月刊）の影印版）208 頁。

30 日刊) 129 頁⁴¹

深沢良太郎氏 (? ~1950、81 歳) との対談が掲載されており、清水太兵衛 (葉多野太兵衛) 及び清水書店についての記載がある (211~213 頁)。

- ・『東京古書組合五十年史』(発行者: 井上周一郎、発行所: 東京都古書籍商業協同組合、昭和 49 年 12 月 15 日刊)
せどり界の雄であった塚富 (塚本富三郎) のことを、葉多野太兵衛の同僚として「西河岸須鉄の出身」と記載している (28、34 頁)。同氏もまた須原鉄二の店から出た人物として記憶すべき方であろう。
- ・鈴木徹造 (1920~?) 『出版人物辞典 明治~平成 物故出版人』(出版ニュース社、平成 8 年 10 月 30 日刊) 241 頁
- ・稲岡勝監修『出版文化人物事典—江戸から近現代・出版人 1600 人』(日外アソシエーツ KK、平成 25 年 6 月 25 日刊) 316 頁

(平成 29 (2017) 年 1 月 28 日稿)

⁴¹ 同書は、『紙魚の昔がたり』(訪書会、昭和 9 年 10 月 25 日刊。再版: 臨川書店、昭和 53 年 10 月 25 日刊) を改編したものである。

【附録】明治警察史コーナーHP 項目一覧（抄）（令和 4（2022）年 8 月 9 日追加）

- ・「法制史学者著作目録選」中「明治警察史コーナー」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉
- ・「松井茂久『警官陶冶篇』研究史抄一本 HP 収載「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』」検討資料」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui002.pdf>〉
- ・「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』（増訂三版、明治 25（1892）年 2 月 18 日刊）」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui001.pdf>〉
- ・「大森鍾一『直興遺篋抄』—「長男仕官に就き与へたる訓戒の書」—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/omori001.pdf>〉
- ・「川路大警視青山墓前の頌徳碑検討一斑（碑文全文、付句読点文、書下し文）—故陸軍少将兼大警視正五位勲二等川路君墓表編修副長官従五位重野安繹撰— 明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kawaji002.pdf>〉
- ・「佐和正関係文献抄—明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sawatadashi.pdf>〉
- ・「坂元純瀨、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問いかけを追って—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakamoto001.pdf>〉
- ・「国分友諒顕彰碑について—原田弘先生のお教えに接して—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kokubukenshoji.pdf>〉
- ・「篠崎五郎関係資料抄—台湾出兵時の徴集隊指揮副長の一人— 明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shinozaki.pdf>〉
- ・「後藤松吉郎とは誰ぞ—明治警察史・日本統治下台湾警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/goto001.pdf>〉
- ・「裁判医学校乃至警視医学校関係文献一斑—明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/saiban001.pdf>〉
- ・「『無冤録述』検討一斑—江戸期及び明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/muenrokujutsu.pdf>〉
- ・「続・『無冤録述』の初歩的検討—江戸期及び明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/muenrokujutsuzoku.pdf>〉
- ・「ヘーン大尉関係文献抄（再訂稿）」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/hoen001.pdf>〉
- ・「明治中葉警官練習所訳官久松定弘等及び筆記者井土経重（靈山）検討一斑—明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yakkan.pdf>〉
- ・「岩瀬忠震関係文献抄（六訂稿）—向島・ヘーン大尉表功碑探訪余聞—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/iwase001.pdf>〉
- ・「内務省警視局御用御書物師須原鉄二とは誰ぞ—明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/subara.pdf>〉

- ・「高橋雄豺博士著作目録（再訂稿）」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takahashi001.pdf>〉

- ・「田村豊氏著作目録」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tamura001.pdf>〉

- ・「中原英典氏明治警察史研究関係著作目録抄（参考）渡辺忠威氏警察史関係文献抄」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakahara001.pdf>〉

【関連事項】（令和 4 年 8 月 9 日追加）

- ・法制史学会： 〈<https://www.jalha.org/>〉

- ・国立国会図書館： 〈<https://www.ndl.go.jp/>〉

- ・国立国会図書館デジタルコレクション 〈<https://dl.ndl.go.jp/>〉

- ・国立国会図書館個人向けデジタル化資料送信サービス（個人送信）（令和 4（2022）年 5 月 19 日開始）

〈https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html〉

- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー（令和 4（2022）年 4 月 1 日追加）

〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉

- ・CiNii: 〈<https://ci.nii.ac.jp/>〉 ⇒ 〈<https://cir.nii.ac.jp/>〉（【[2022] 4/18 更新】CiNii Articles の CiNii Research への統合について）、〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉

（了）